

東京

「其の日」暮らし

＝ドイツ編＝



ドイツ人の良いところ？

去年の今頃は庭のサクランボがたわわに実っていて、ベランダから手を伸ばすと取れそうなのに取れないという生殺し状態を満喫？ していたのに、今年はまだ青くて小さい実が付いているのを見るたび「ドイツの夏は短いのにまた一段と短くなるのかなあ？」とぼんやり窓の外を眺めてしまいます。「じゃあ、気分転換に外に出ればええやん」となるのですが、そうひよいひよいと外に出られない理由があるのです。

先日、恥ずかしながら息子がケガをしました。それも自分で自分の足を踏んで・・・。普通なら「あつはつはつは」で終わるところでしたが、どうも様子がおかしいのです。時刻は金曜日の夜7時半過ぎ。近所の病院はもちろん閉まっているので救急病院に行くことにしました。ここの救急病院は小児専門の病院でお世話になるのは2回目です。今回は外科に回されました。金曜日の夜と言うこともあり待合室にはすでに15組以上の人々が待っていました。せいぜい2時間くらいで帰れるかなあと考えていたのですが、診察までに2時間かかりました。その後1時間待ってレントゲン、そこから1時間待って診断結果を聞き、また1時間待って処置。全部終わったのがなんと夜中の1時にただひたすら待つしかなく、周りの人たちも最初は談笑していたのですが（みんな腕とか足のケガなので見た目は元気なのです）時間が経つにつれどんどん口数が減って空気が重くなっていく。イライラしても仕方ないのですが「何時間またなあかんねん！」とイライラ。息子は痛いし眠いし、でも痛くて眠れないとグズグズグズ。処置の段階で名前を呼ばれても無愛想に立ち上がるだけで精一杯。「やっと帰れる」と処置室にいくとそこは手術室のような所でした。そして処置室の先生は息子のグズグズだけでなく、私達の不安とイライラをも吹っ飛ばしてくれました。その先生とたわいのない話をするだけで、気づいたら3人とも笑えていたのです。（疲れすぎてハイになっていただけかもしれません）笑わせるだけでなく処置も手早くとても丁寧な仕上がりの良かったです。その上、普段なら自分たちでタクシーを呼ばなければならぬところを、その先生が直接手配してくれたのです。おかげですぐにタクシーが到着して15分で家に着くことが出来ま



した。あのままドンヨリ気分を引きずっていたら、きっとどんどん疲れていたところを処置室の先生のおかげで持ち直すことが出来て本当に助かりました。翌日も経過を見るために同じ病院に行くことになりましたが、今度は息子を乳母車に載せて二人で行くことにしました。電車で乗り合わせた家族連れ、バス停で待つおばあちゃん、エレベーターに乗り合わせた赤ちゃん連れのお母さんなどなど、6〜7人くらいの人が「どうしたの？何でケガしたの？」と聞いてくるのです。その都度「自分で自分の足を踏んで骨折しました」と説明するのですが、面白いことに皆、初対面なのにどんどん聞いてくるのです。そしてみんな「お大事に」とか「ママが注意して見ないとね」と分かれる時に言葉をかけてくれるのです。お節介なかもしれないけど、そんなところもドイツ人の良いところやなあ。と思いました。



PUKIPUKI・N

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞